

日本分類学会連合ニュースレター

*News Letter published by the Union of
Japanese Societies for Systematic Biology*

No. 12 [2007年12月21日]

新連載「連合加盟学会のトピックス」

第4回アジアシダ学シンポジウム ガーデンショー開かる 加藤雅啓(日本シダ学会)

日本シダ学会の活動の1つは国際集会の開催であり、会員の参加をひろく呼びかけている。第4回のアジアシダ学シンポジウムがガーデンショー(シダその他の植物の園芸栽培)と平行して、去る2007年11月13日~17日にフィリピンのセントラルミンダナオ大学(Central Mindanao University, Musuan, Bukidnon)で開催された。この集会はセントラルミンダナオ大学、ロサンゼルス国際シダ学会、日本シダ学会、フィリピン園芸学会の共催、DIVERSITAS等の後援で行われ、13カ国約160名が出席した。アジアの国々の他、アメリカ、メキシコ、オランダ、ニュージーランドからも参加者があった。日本からは10名が出席し、内8名が日本シダ学会員であった。治安を不安視する向きもあったが、実際行ってみると取り越し苦労で、ミンダナオ北部にある大学周辺は穏やかな田舎の町の風情であったのでほっとした。シンポジウムエクスカージョンは2日をかけてキタングラド山(Mt. Kitanglad)などに出かけた。標高2900m近い山地だったのだが、シダは豊富であり、一同満足して調査を終えた。

このシンポジウムは第1回から第3回までのアジアシダ学セミナーを継承拡大したものである。この集会はそもそもアジアのシダ植物分類学の研究を後押しすること、ついでにシダの採集を兼ねることを目的として、日本シダ学会会員が音頭をとって始まった。明確に意図してはいなかったものの、実質的な主催団体は当学会であった。第1回(1990年)はインドネシアジャワ島のボゴール植物園とチボダス植物園で開かれた。園内でセミナーを開催した後、ゲデー・パングランゴ山とサラク山で植物採集を行なった。第2回(1992年)は台湾台中市の国立中興大学で開かれ、鶏頭他で植物採集した。第3回(1995年)は中国云南省昆明市の昆明植物研究所で開かれ、採集にはベトナム国境に近い河口へ出かけた。これら過去3回の集会では、参加者の国籍の大半は日本と開催国が占め、それ以外の国からは少人数が出席した計30~60名の小規模なものであった。第4回となる今回は飛躍的に規模が発展したというわけである。

アジアは日本など温帯地域からインドネシア、マレーシアなどの熱帯地域にかけて湿潤な地域が連なり、世界でもっとも豊かなシダ植物相が成立している。筆者は1983年から1986年にかけて3回、計8ヶ月間の植物調査をインドネシアのモルッカ諸島で行った経験がある。セラム島は四国と同じ面積だが、標高3000mの石灰岩の山が島の中央にあり、その島から700種近いシダ植物が採集された。日本全体で650種程度であるから、種多様性はすこぶる高いといえる。1993年にはイリアンジャヤで1ヶ月余り調査したが、ニューギ

ニア高地で有名なワメナ渓谷は言うに及ばずジャヤプラ近くの低山地(シクロプ山系)でもシダの多さに圧倒されてしまった。ニューギニアの多様なシダ植物相を相手にしてその解明を行なっていくには、長期的で本格的な調査研究を要することは明白となり、中途半端な意志ではとてもやれないと感じてこの1回で手を引いた。それでも珍しいシダに出会ったことで満足した。

次回第5回は2010年にシンガポール植物園(この時が開園150周年にあたる)で開かれる予定である。シンガポール植物園は、20世紀を代表するシダ植物分類学者の一人R. E. Holttum博士(後にイギリス王立キュー植物園に移る)が戦前活躍した植物園であり、熱帯アジアのシダ研究のメッカであったところである。新しい植物標本館の建物もできたとのことで、参加するのが今から楽しみである。郊外のブキティマ自然保護区にはかつては豊かな植物相が存在していたことを物語るシダ谷があり、シダ観察が楽しめるだろう。

小規模な国際集会は家庭的な雰囲気の中で開かれるため、話も弾み、共同研究も生まれやすい。酒宴の席での歓談ならなおさらで、酒の勢いもあって研究に対する想いを熱く語る一幕もあったほどである。日本シダ学会は規模こそ小さいものの、調査(エクスカージョン)つきの国際的な集会を手軽に行っている。シダ植物分類学の分野で世界のトップレベルにある研究者が当学会会員の中にいるので、このような集会には積極的に取り組んでいる。

日本藻類学会の活動

川井浩史(日本藻類学会)

日本藻類学会の活動のうち、学会誌や大会運営に関わる最近の話題と、2007年から学会が中心となって開始した小笠原諸島の海藻類多様性調査について紹介したい。

日本藻類学会では1995年にそれまで和英混合であった会誌「藻類; The Japanese Journal of Phycology (Sôruï)」を英文誌「Phycological Research」と和文誌「藻類; The Japanese Journal of Phycology (Sôruï)」に分割した。以来、前者はBlackwell Publishingにおいて組版・印刷して年4回(1~4号)、後者は和文誌編集長を中心としたDTPにより年3回(1~3号)発行している。両誌は分割時にそれ以前からの巻数を引き継いでおり、2008年には第56巻(創刊56年目)となり、これは現存する藻類学専門誌では世界でも最も古いものである。このうち、英文誌は原著論文の掲載を主な目的としているが、分割を機に国際化を進め、副編集長の半数以上、論文審査員の70~80%は外国人であり、また論文の投稿自体も海外からの方が多し。また、Blackwell Publishingの電子ジャーナル(Blackwell Synergy)にも含まれていることから、英文誌に掲載された論文のインターネットダウンロードは2006年には

年間2万件を超えた。このおかげもあってか、2004年には念願であったトムソンサイエンティフィック社(旧ISI社)のデータベースへの登録が復活し、2007年からはいわゆるインパクトファクター(IF)が公表されるようになった(2007年:1.069)。IFは一旦数値が出ると、その上下にやきもきしなくてはならないので編集に関わるものにとっては悩ましいことである。また分類関係の論文が多い本誌にとって、IF自体あまり意味のある数値ではないかもしれないが、Phycological Researchは分類以外の論文も少なくないことからこれを機会にレベルの高い投稿がますます増えることを期待したい。

一方、和文誌は和文の原著論文や総説、学会関係のニュースを掲載するのが主な目的であるが、大会の発表要旨や英文誌掲載論文の和文要約を掲載するという役割も果たしている。和文誌の記事のうち、「藻類学最前線」という連載は、若手会員が藻類学に関わる最先端の研究成果・トピックについて解説するという企画で、あまりに革新のスピードが速いために教科書の刊行が全く追いついていけない藻類学の知識をアップデートする上で非常に役に立つ。この企画、本来は大学院生などの若手のレベルアップを目指したものであったと思うが、授業内容の見直しに際してこの連載のお世話になっている大学教員も多いのではないだろうか。また、この企画は学会誌連載の枠を飛び出して、大会の中でのワークショップに発展した。すなわち、2007年度の第31回大会(於神戸大学)から、若手(中堅?)会員のイニシアティブによる、「藻類学最前線」のセミナー版のようなワークショップが始まった。今回は2つのワークショップ「最新!分子系統解析法」と「DNAを用いた藻類の集団解析—海藻・アオコ・赤潮研究の最前線」を並行して開催したが、いずれも予想を大きく超える申し込みで、非常に好評であった。このワークショップは2008年度の大会(3月21~24日、於東京海洋大学)でも「分子系統解析の基礎と実践」、「海藻と付着性微細藻(珪藻・藍藻・渦鞭毛藻・ハプト藻・鞭毛虫)の分類と生態」として企画されており、恒例となることを期待したい。

さて、学会組織に関しても、この数年をかけてさらなる国際化をめざした整備を行ってきた。現時点では海外会員は全体の約1割ではあるが、国内会員と基本的に同等の権利を与えるべきであるとの考えから、海外会員に与えられる権利やサービスの充実を図ってきた。具体的には英語版の会員規約の作成や英文ホームページの開設、海外区の評議員枠の創設や、会長・評議員選出における選挙権の付与である。これらは思った以上に手間暇のかかる作業であったが、2006年によりやくほぼ整備が終わり、海外からの投票も含んだ会長・評議員選挙を実施した。これを受けて、2007年には最初の海外区評議員2名が選出され、その内のお一人であり、20年来の会員であるAkira F. Peters氏には、はるばるフランスから評議会・総会に出席していただいた。

小稿で最後の話題になるが、小笠原諸島は我が国を代表する海洋島の一つであり、2006年1月29日の環境省の発表にもあるように、世界遺産の登録に向けて準備が進められている。小笠原諸島の生物相については、陸域では動物・植物を問わず詳細な調査に基づき多くの固有種が確認されているが、これに対して海域生物については、魚類を除くとかなり限定的な知見しか得られていない。このうち海藻相については過去にいくつかのフロラ調査(加崎らによる1980年頃の調査・報告、宮田による1990年頃の調査・報告)がなされ、リ

ストが報告されているが、調査以降かなりの年月がたっているほか、これらの調査報告は一般には入手しにくい状況になっている。そこで、2007年度から日本藻類学会の調査研究活動の一環として、学会に所属する海藻類分類研究者により小笠原諸島の海藻フロラ調査を開始した。具体的には2006年12月にまず予備的な調査を行った上で、学会内で会員にこの調査プロジェクトへの参加を呼びかけ、これに応じた有志会員7名により2007年5月9日から5月12日にかけて第1回目の現地調査を実施した。調査は潮間帯における採集、スノーケリング、スキューバダイビングによる海藻類の写真・ビデオ撮影と採集を行い、野外観察結果に基づく分布状況の記録と予備的な種名リストの作成を進めている。また、これらの標本を元に、いくつかの分類群について遺伝的多様性の解析を行い、固有種や隠蔽種の有無を確認する研究を実施しているほか、得られた標本の画像は画像データベースとしてホームページで公開すべく準備を進めている。第1回目の調査は父島に限って行い、また実際の潜水調査は2日間ときわめて短期間の調査ではあったが、多くの未報告種をはじめ、予想を超える種の分布が確認されている。この成果となるフロラリストは日本藻類学会大会、学会誌(和文誌「藻類」)などにおいて報告し、会員のみならず社会で広く活用出来るようにする予定である。

ある地域の生物相の多様性調査を多くの分類研究者が集って行うといった事業は、これまでも様々なスケール、主体で行われてきた。しかし、少なくとも藻類の分野においては、多くの場合、科研費などの研究費をもとに大学の分類学教室などが中心になって組織されたもので、学会の事業として行った例はほとんどなかったように思う。大学の分類学に関係する研究室が軒並み規模を小さくしている中、一つの研究グループだけで大規模な調査を実施するのはだんだん難しくなっている。このため、今回の小笠原調査のようなプロジェクトはこれからの学会の役割を考える上で重要な方向性の一つを示していると考えている。

日本分類学会連合第7回シンポジウム

日本分類学会連合第7回シンポジウム「動物界高次分類群の系統と分類—発生から分子へ」が以下の要領で開催されます。加盟学会会員の皆様のご参加をお待ちしております。

日時: 2008年1月12日(土)午後

場所: 国立科学博物館新宿分館

演者・タイトル:

和田 洋(筑波大学)

「エボデボから見た後口動物の系統」

倉谷 滋(理研CDB)

「反復説再考」

白山義久(京都大学)

「無脊椎動物の系統と分類—最近の話題」

西川輝昭(名古屋大学)

「脊椎動物の起源を探る—脊椎動物の最も

新しい共通祖先はホヤかナメクジウオか?」

馬渡駿輔(北海道大学)・伊藤 希(筑波大学)

「系統ってなに?」

日本分類学会連合加盟学会の大会・シンポジウム

日本古生物学会

日本古生物学会第 157 回例会が以下の日程で開催されます。
会期：2008 年 2 月 1 日(金)～2 月 3 日(日)
場所：栃木県宇都宮市
開催：宇都宮大学・栃木県立博物館

日本生物地理学会

日本生物地理学会第 63 回年次大会が以下の要領で開催されます。
日時：2008 年 4 月 12 日(土)～4 月 13 日(日)
会場：立教大学
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

日本藻類学会

日本藻類学会第 32 回大会が 2008 年 3 月 21 日(金)～23 日(日)、東京海洋大学に於いて開催されます。

日本菌学会

日本菌学会第 52 回大会が下記の要領で開催されます。
会場：三重大学 三翠ホール
日程：
2008 年 5 月 30 日(金)
編集委員会
理事会
評議員会
2008 年 5 月 31 日(土)
総会
各賞授与式および受賞講演
シンポジウム 1 題
小シンポジウム(公募)およびポスターセッション
懇親会
2008 年 6 月 1 日(日)
小シンポジウム(公募)およびポスターセッション

日本産生物種数調査委員会より

日本産生物種数調査委員会では 2003 年から調査結果をウェブ上で公開してまいりましたが、約 90 の高次分類群名に関して、表示に用いる上でタグとなるデータが欠落していたことが判明しました。そこで元データを精査し、これら欠落していたタグを当てはめる作業を行うと共に、扁形動物門に関しては、現在一般に受け入れられている分類体系に更新しました。更新したデータは 2007 年 11 月より公開しております。

TAXA —— 生物分類学メーリングリスト

日本分類学会連合が運営するメーリングリスト〈TAXA〉は、生物分類学に関する情報交換や討論をするためのメーリングリストで、生物分類学に関心をもつすべての方に開放されています。〈TAXA〉メーリングリストは下記の趣旨により開設されました：

日本分類学会連合は、「生物の分類学全般にかかわる研究および教育を推進し、我が国におけるこの分野の普及と発展に寄与することを目的(規約第 2 条)」として、2002 年 1 月 12 日に設立されました。現在、

分類学に関係の深い 27 の学会が加盟しています。その後、本連合はこの目的に向かって様々な活動を展開してきましたが、このたび新たな事業として「メーリングリスト〈TAXA〉」を開設することになりました。このリストの趣旨は、本連合からの広報のほかに、登録会員が互いに分類学に関する情報交換や討論をするための場を提供することにあります。したがって、このリストは本連合の加盟学会の会員ばかりでなく、分類学に関心をもつすべての方に開放されます。なお、リストへの登録など管理、運営は本連合の担当者が行いますが、投稿は登録会員なら誰でも自由に行えます。多くの方が登録くださいますようご案内申し上げます。

2003 年 12 月 21 日
日本分類学会連合
代表:加藤雅啓

〈TAXA〉は 2003 年 12 月 13 日に開設され、2003 年 12 月 24 日午後 5 時に稼働開始しました。2007 年 12 月 2 日の時点で【832】名の会員が登録されています。入会を希望される方は、

- 1) メールアドレス
2) 氏名(日本語表記ならびにローマ字表記)
3) 所属

を明記の上、〈TAXA〉運営担当の三中信宏(taxa-admin@ml.affrc.go.jp)までご連絡ください。

[編集後記]

好評をいただいております連載「連合加盟学会の活動紹介」シリーズが昨号第 11 号をもって終了いたしました。現在連合に加盟している全 27 学会の沿革・会員数・会報・大会などの活動状況を本誌上でご紹介出来たことは、連合にとって大変有意義であったと思います。今号第 12 号からは新連載「加盟学会におけるトピックス」と題しまして、各加盟学会における最近の話題や問題、和文誌における名物連載などをご紹介頂き、加盟学会会員相互の更なる理解に役立てばと存じます。読者に「どれ、ひとつ入会してみようかな」と思わせるような、各学会のトピックスや、誇れる自慢のネタなどをご紹介頂ければと考えております。今号では日本シダ学会と日本藻類学会から、それぞれの学会活動の様子が生き生きと伝わる素晴らしい記事をご寄稿頂きましたこと、お礼申し上げます。

分類連合ニュースレターでは随時加盟学会員の皆様から広くご寄稿を募集しております。原稿は柘原宛(kazi@mail.sci.hokudai.ac.jp)に電子メールでお送りください。電子メールが使用できない場合は FAX(011-746-0862)もしくは郵送(〒060-0810 北海道大学大学院理学院自然史科学分野)でお送りいただいてもかまいません。皆様からの多数のご寄稿をお待ち申し上げます。

(ニュースレター編集担当:柘原 宏)

日本分類学会連合ニュースレター 第 12 号

2007 年 12 月 21 日発行

発行者 日本分類学会連合

事務局 〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館

編集者 柘原 宏
